

匹見町埋蔵文化財調査報告書第38集

—(主)六日市匹見線三島工区交A(改良)工事に伴う発掘調査報告書—

陣ヶ原遺跡

2002年2月

島根県匹見町教育委員会

—(主)六日市匹見線三葛工区交A(改良)工事に伴う発掘調査報告書—

陣ヶ原遺跡

2002年2月

島根県匹見町教育委員会

例　　言

1. 本書は、島根県益田土木建築事務所の委託を受けて、匹見町教育委員会が平成12年度に行った
(主) 六日市匹見線三葛IC区交A(改良)工事に伴う、陣ヶ原遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て、次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会		
調査員	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺 友千代	
調査補助員	匹見町教育委員会主任主事	山本 浩之	
	匹見町埋蔵文化財調査室	栗田 美文	
	(臨時職員)		
	大賀 幸恵		
	ク	ク	大谷 真弓
調査協力者	渡辺 聰		
調査指導	島根県教育委員会文化財課		
	山口大学人文学部教授	中村 友博	
事務局	匹見町教育委員会教育長	松木 隆敏	
	匹見町教育委員会次長	大谷 良樹	
	匹見町教育委員会社会教育主事	河野 敏幸	
発掘作業員	森脇 雅夫 栗田 勉 栗田 修 斎藤 直行		
	村上 強 長谷川時子 大谷ミツコ 斎藤美代子		

3. 発掘調査に際しては、益田土木建築事務所匹見出張所の内部技師をはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多人なご協力をいただきとともに、山口大学人文学部の中村友博教授から一方ならぬご教示を得たことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。

また、発掘現場においては、地元の方々にご理解とご協力を得て、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、現場あるいは編集に利用した現地地図は、匹見町上地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、また位置図などは縮尺1/25000を使用した。なお炭化物の¹⁴C年代測定は財團法人九州環境管理協会に委託して行ったものである(第5章)。

5. 編集にあたっては、山本浩之・栗田美文・大賀幸恵・大谷真弓らが携わり、執筆・編集は渡辺友千代が担当した。

目 次

第1章 発掘調査に至る経緯と経過	(渡辺 友千代)	1
第1節 発掘調査に至る経緯.....		1
第2節 発掘調査の経過.....		1
第2章 調査地域の地勢と歴史環境	(渡辺 友千代)	2
第1節 三 葛 地 区.....		2
1. 地区の地勢.....		2
2. 歴 史 環 境.....		2
第3章 調 査 概 要	(渡辺 友千代)	5
第1節 調査位置と調査区設定.....		5
1. 調査地の立地.....		5
2. 調査区の設定.....		5
第2節 層序と堆積状況.....		5
1. 基本的層序.....		5
2. 堆 積 状 況.....		7
3. 層序と遺物包含層.....		8
第4章 出 土 遺 物	(渡辺 友千代)	10
1. はじめに		10
2. 実測遺物		10
第5章 炭化物測定結果について	(川村 秀久)	14
第6章 小 結	(渡辺 友千代)	15

挿図・図表目次

第1図 位 置 図	1
第2図 遺跡位置と周辺遺跡分布図	3
第3図 地形断面図	4
第4図 調査地点配置図	6
第5図 地区名図	7
第6図 上 層 図	8
第7図 土器実測図	11
第8図 石器実測図	12
第1表 出土遺物集計表	10

図版目次

図版1 調査地点鳥瞰

図版2

1. 東から紙祖川を挟んで遺跡をみる

2. 対岸の北側からみた遺跡

図版3

1. バックホーによる上位層の掘削作業

2. 発掘作業風景（土屋を設営して行った）

図版4

1. B調査区に出土した土器（5層）

2. B調査区に出土した土器（5層）

3. A調査区に出土した土器（8層）

4. B調査区に出土した石鏃（5層）

5. B調査区に出土した礫器（5層）

6. A-B拡張区に出土した炭化物（8層）

図版5

1. A調査区の北西・南西壁の堆積状況

2. A・B調査区の南西壁の堆積状況

図版6

1. A調査区の北西壁の堆積状況

2. B調査区の南東壁の堆積状況

図版7

1. A調査区側からみた完掘状況（北西から）

2. B調査区側からみた完掘状況（南東から）

図版8

1. 実測土器類

2. 実測石器類

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯

本事業は、県道二筋工区交A（改良）工事に伴って発生したもので、その旨の書類は益田土木建築事務所から平成12年1月31日付で提出された。

匹見町教育委員会は、工事予定地は中世期の古戦場としての周知の遺跡であることから保存が望ましく、ルート変更等の検討を平成12年2月1日付をもってお願いしたのであった。その後、同年3月に2回にわたって協議したが、工法上からルート変更是困難という結論に至り、12年度早そうに確認調査を実施することを両者間で決めたのであった。

分布（確認）調査は、平成12年4月20日から同年5月18日にかけて実施した。その結果、中世文化期のものは顯著ではなかったが、3調査区（1調査区は2mの方形区）から数点の縄文七器、そして炭化物が出土したのであった（註1）。

したがって当教育委員会は、平成12年8月3日付でその結果を工事主体者に報告するとともに、記録保存のための調査が必要である旨を伝えたのである。

第2節 発掘調査の経過

本現地調査は平成13年1月23日に着手し、頭初から降雪に見舞われることがあったため、ビニールシートによる上屋を設けて実施した。また遺物が僅少で、しかも人為の擾乱的様相を呈する上位層（表土～3層）においては、バックホーによる機械導入をするなどして対応したのであった（図版2-1-2）。

なお、発掘面積は100m²余りであったが、基盤層と想定される8層までの深度は2m前後を測って、その掘削体積は200m³に及ぶといった費消を要する発掘調査であったが、同年3月23日には完了することができたのであった。

（渡辺友千代）

註1 「陣ヶ原地点」（『匹見町埋蔵文化財調査報告書第33集匹見町内遺跡詳細分布報告書』）



第1図 位置図

第2章 調査地域の地勢と歴史環境

第1節 三葛地区

1. 地区の地勢

本地区は、町域の南東側という僻地に位置（第1図）し、さらに該地の南東側には1,000m内外の中国脊梁山地が北東—南西方向に走って境山をなし、そこは広島・山口の2県に接しているという山間地にある。また地区を貫流する紙祖川の源流は、その2點とに接した後冠山（1,300m）にあって東流し、狭小な谷平地を形成した集落で積木川・三葛川などを集めて北流するといった立地にある（第2図）。

こうした紙祖川に沿って形成された狭小な谷平地は、堅田・篠山・三葛という集落地にみられ、このうち上流側の三葛が比較的拓けていて、それらの標高は約450~550mを測る。また流下する紙祖川をU字状に取り囲む山地は、南東の高山で1,279mの額々山、赤谷山（1,181m）、安藏寺山（1,263m）などが重複し、また下流の北西でも700~900m台の山地が聳立している。

2. 歴史環境

山間地である本地区は、古くから農林業を中心とした生業によって支えられてきた。殊に製炭業は昭和中ごろまでは盛んに行われ、現在では山葵（わさび）・椎茸栽培などの1次産業が中心である。

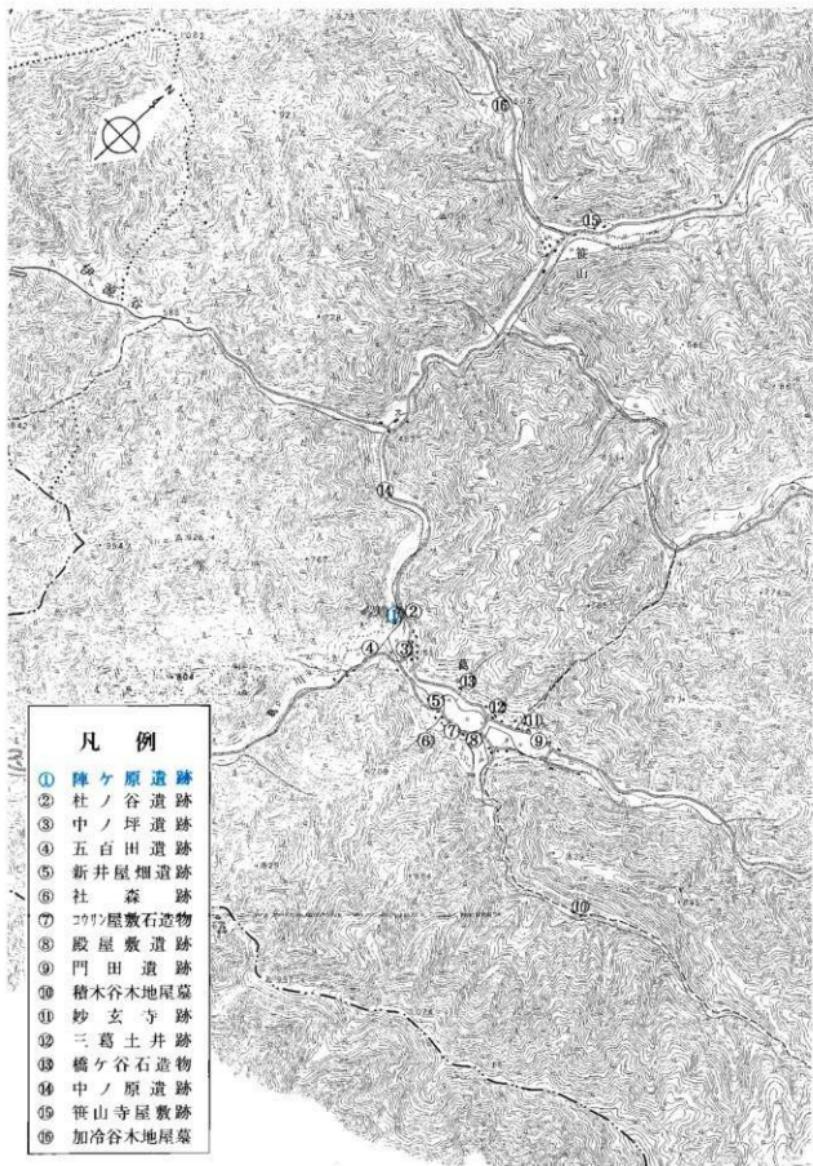
近世の藩制時代には匹見組の16ヶ村中の「三葛村」として成立し、その生商は凡そ140石~150石余りであり、戸数は30~35であった（後期）。そして山嶺では焼畑とともに三稜・椿が栽培されて石見半紙も盛んに行われたのである。また一方、山地には「本地師」と言われる漂泊の民が良材を求めて逗留した地名としても顯著（第2図）で、その痕跡は今でも多くの墓石、あるいは「本地原」といった地名などにみることができる。

本地区における中世の様相は明らかではないが、新井屋塗では初期に位置づけられる須恵器が採集されており、また杜ノ谷では13世紀のものと考えられる「蓬莱山文鏡」の和鏡が発見されているなど、その痕跡がないでもない（第2図）。一方、15~16世紀において、地区的支配階級だったと考えられる大谷氏の「殿屋敷遺跡」では、該当期における支配者がどのような生活振りであったかなど、出土した遺物・遺構がそのことを如実に語っており、貴重な遺跡も存在しているのである。

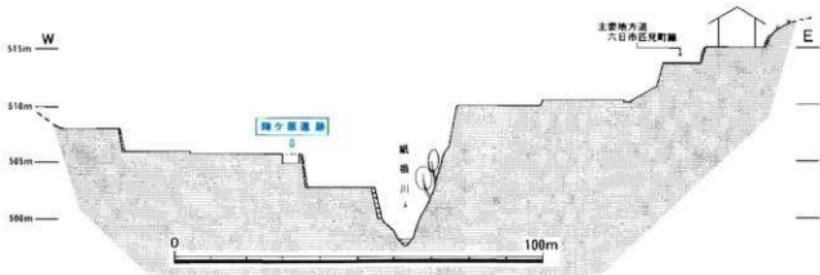
そのほか原始・古代では、その殿屋敷遺跡の下層から縄文時代晩期のものが。そして門田遺跡からは數点はあるが、縄文時代前期のものが発見され、また五百川では縄文時代後期のものが出土しているなど、該当期における遺跡はけして貧弱ではないのである。また中ノ坪遺跡では竪穴住居、数10基の集石などの遺構をはじめとして、多量な縄文時代前期から中期の遺物が発見されており、とくに注意されているのである（註1）。

このように山間の狭地とはいえ、比較的縄文時代が分布しているという現象には該当地が狩猟採集時代において、落葉広葉樹林地帯という最適地であったこと、また石材の供給地という冠山に近接していたということによるものと考えられる。

（渡辺友千代）



第2図 遺跡位置と周辺遺跡分布図



第3図 地形断面図

註1 〔中ノ坪遺跡〕(匹見町埋蔵文化財報告書第26集) 匹見町教育委員会1999年3月



試料（炭化物）採集風景

第3章 調査概要

第1節 調査位置と調査区設定

1. 調査地の立地

本遺跡は、東一西方向に形成された谷平地（二葛地区）の下流端にあたる島根県美濃郡匹見町大字紙祖口463番地ほかに所在し、地名を陣ヶ原（じんがばら）といわれている場所であるが、そこは南西流する紙祖川が至近で三葛川を合わせ北流し、そして北西に変じるといったUの字状の場所で、また山地は両岸がせまっているといった極めて狭小な左岸に立地している（第2・4図・図版1）。

現地は3段からなる水田が形成され、このうち開発が行われるのは河側から2段目の水田の先端部にかけての範囲であったため、原地形を遺していると想定されるその先端部を調査対象地としたのである（第3図・図版2-1・-2）。なお、現地表面標高は約506mであった。

2. 調査区の設定

当地点は平成12年度における分布（試掘）調査によって遺物の有無は捉えられていたので、その状況を踏まえ、任意に設定することにした。

つまり、工事予定地の端部にあたる南西側は北西一南東に向かって22mのもの、そして上流（南西）側は河（北東）側に向かって7mのものとしたのである。また、これに対応する下流（北西）側は、落差のある石垣集落との兼ね合いを考え3.5mを測り、そして7m測った上流のものと、この両端部を結ぶといった変則的な造り方で設定したのであった（第4・5図）。

第2節 層序と堆積状況

1. 基本的層序

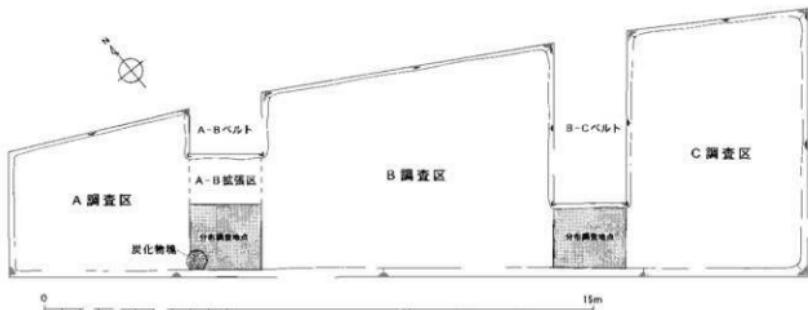
2m前後の掘削深度における堆積層序は、上位から1層の暗灰色粘質土（耕作土）、2層の赤橙色土（酸化鉄の含浸）、3層の黒褐色粘質土、4層の黄褐色粘質土、5層の黄灰砂土、6層の茶褐色土、7層の黄灰色小疊層、8層の黄褐色砂土の順で堆積していた。ただし、酸化鉄の含浸による3層は上流（南東）側では捉えることができず、また下流（北西）側では1層の耕作土、そして2層の赤橙色土が2重に堆積するなど、基本層序どうりとはいえない部分もみられたのであった（第6図・図版5・6）。



掘削作業風景



第4図 調査地点配置図



第5図 地区名図

2. 堆積状況

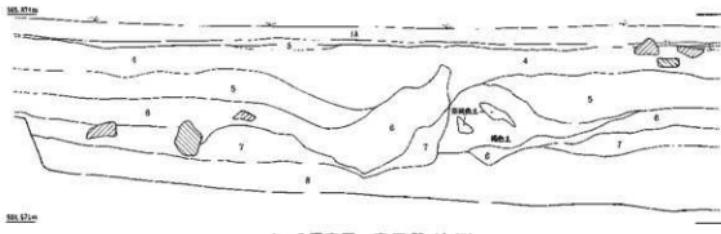
層序の堆積は2m前後であったが、全体的には上流側が1.6mと浅く、その逆に下流側は2.2mを測って厚く堆積していたのである（第6図・図版5・6）。これらを具体的にみていくと、後述のとおりであった。

まず1層は、暗灰色粘質上の水田耕作土である。層厚は凡そ15~20cmを測って、ほぼ平均に堆積するものの、上流側の標高は10cmばかり高かった。そして2層は、酸化鉄が含浸して赤橙色を呈したものであったが、上質は3層の黒褐色土に酸化鉄分が含浸して形成したものと考えられる。層厚は2~7cmと含浸差がみられたが、上流側の南東辺では、その含浸は捉えることができなかつたのである。また一方、この1・2層は上流辺において、相互に2重に形成されていることが認められたことから、水田の造り直しが行われたものと考えられる。

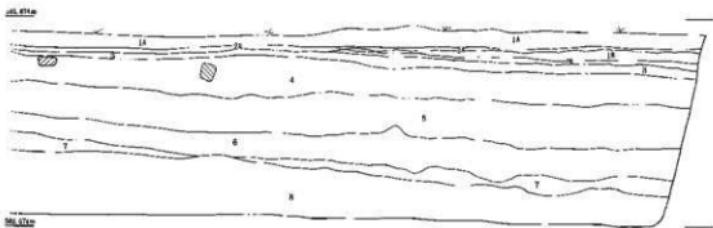
黒褐色土の3層は、有機質性の堆積で形成された層位と思われるもので、層厚は10cm程度と薄かつた。ただし南東半部では確認することができなかったことから、おそらく上位層との相互関係からみて、水田造成等によって削除されたものと思われる。4層は黄褐色粘質上で、層厚は35~60cmを測って比較的厚く堆積していた。掘削は全般的に容易であったが、5~20cm大の礫がみられ、中には徑50cm大のものもあって苦慮する場面もあった。全体的に北西~南東方向に向かって僅か傾斜して堆積する。

5層は黄褐色砂土で、層厚は35~55cmを測って4層と同様、比較的厚く堆積していた。礫は余りみられず、多半が砂粒によって形成された層位で、掘削は容易であった。なお、本層の南東部辺の局地において、食い違いによる断層がみられた（第6図・図版5-2）。これは6層の迫上がりによって切斷されたものと思われ、この曲動は地震等による地殻変動によって生じたものであろう。そして、6層は有機質を含んだ層位と思われ、茶褐色~黒色を呈し、礫は余りみられなかった。層厚は20~60cmを測るが、6層と同様、曲動地点でやはり断切部分がみられたのである。

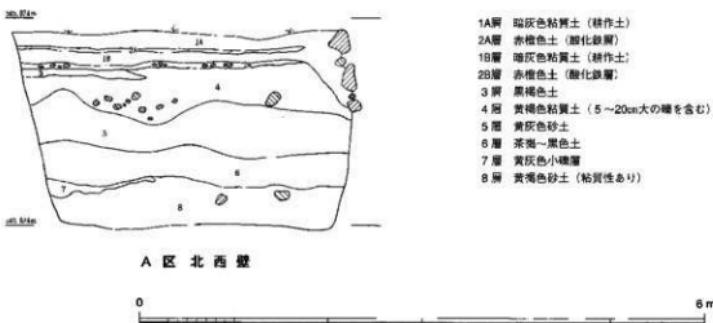
7層は、黄灰色した小礫層で、中には徑50cm大の円礫のものもみられた。層厚は尖滅部分から40cmを測り、厚浅差のある層位であった。8層は黄褐色した砂土で、やや粘質性があることから、多少の有機質を含んで形成されたものではなかったかと思われた。その層厚は20~60cmを測って厚く堆積し、



A・B 調査区 南西壁 (左辺)



A・B 調査区 南西壁 (右辺)



第6図 土層図

他層の4層以下と同様、やはり南東（上流）一北西（下流）方向に緩傾斜して堆積していたのである。なお、その以下の層位については凹凸が充填していて、掘削にも困難を来し、また遺跡上からみても価値が薄いと判断して止めることにしたのであった。

3. 層序と遺物包含層

遺物が出土した層序は、上位層からいようと5層の黄灰色砂土、7層の黄灰色小礫層、そして8層の黄褐色砂土の3層からであった（出土遺物集計表）。これらの遺物出土層位は、いずれも砂粒系であつ



8層下位に出土した炭化物

た、そのためか遺構は把握することができなかつたのである。

このうち5層では条痕・縄文・爪形文様のものが（4点）出土したが、うち1点の爪形文はその間隔が狭く施文されていることから、縄文中期初頭に位置付けられる薺島式のものであろうと想定される。石器は石錐や剥片など8点が出土した。また7層では条痕文様のもの1点と、石器では石錐と思われるもの1点に、同

じく石器剥片1点8層下位に出土した炭化物が出土したのみであった。

そして8層に出土したものは上器2点、石器剥片1点、それに比較的多量の炭化物であった。このうち内外面とも粗い条痕文様のもので、また炭化物においては分析 (^{14}C 年代測定) 結果から6300年のものであったのである（第5章—炭化物測定結果について）。

(渡辺友千代)

第4章 出土遺物

1. はじめに

本調査区における出土遺物については、すべての遺物において調査区ごとに出土層位、また出土標高も捉えた上で採り上げた。ただし後世の石垣築地等によって搅乱された地点での1点(陶磁器)のみについては、そういった基準に基づいて行ってはいない。また出土遺物の内訳は、出土遺物集計表に示しているとおりであるが、炭化物を除いて土器・石器類を中心とした19点という極めて少量のものであった。しかも一定のまとまりをもって出土するといった傾向はみられず、すべて単独的な出土

状況であった。

本章では実測遺物を中心に以下、詳細について記述していくことにするが、ただ炭化物については出土体積および重さの法量のみとしているので、その出土状況については末尾で捉えることにしたい。

区名	層名	陶土器	炭化物	陶磁器類	石 鋸	石錐?	石 錐	繩 帯	石 器	剝 片	計
	5層北西壁	1									1
A区	5 層						1				1
	8 層	1									1
B区	5 層	3			1		1	2	1		8
	7 層	1				1			1		3
C区	8 層	1	380㎤						1		2
	5 层								2		2
	計	7	895㎤	1	1	1	2	2	5	19	

第1表 出土遺物集計表

2. 実測遺物

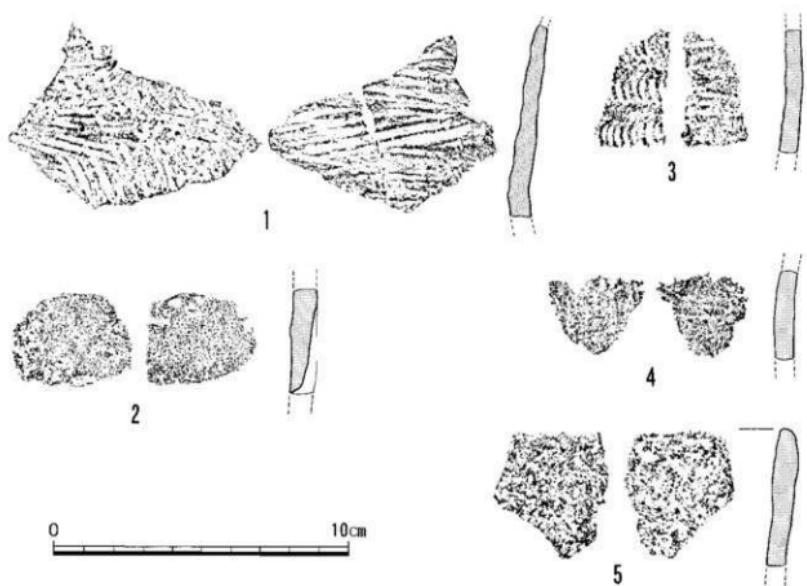
実測土器(第7図・図版8-1)1は、B調査区の8層下位に出土した頭下平部片で内外面とも横、斜め方向のハイガイによる条痕調整が顕著なもの。器肉は厚手といえるものではないが、焼成はよく堅密である。内外面には煤が付着して黒褐色を呈するが、胎上は褐色で、僅か砂粒を含んでいる。同層内から検出された炭化物の年代値からみて、縄文早中期のものと想定できるもの。

2は、B調査区の7層に出土した上器片であるが、表面の人半が裂損してて調整は定かではない。内面にはナデ調整で、胎上には2mm大の砂粒を比較的含み、色調は褐色を呈する。

3~5は、いずれもB調査区の5層から出土したもの。このうち3は、外面に爪形文、内面は条痕調整したもの。外面にCの字状に施文された爪形は細く、そして間隔も狭く、その上面をナデで仕上げている。器肉は比較的薄く、焼成は良い。胎上は緻密で、その色調は橙褐色である。施文方法、調整などからみて、鷹島式に比定できるものであろう。

4は、内外面とも条痕調整の後、ナデとしたもの。外面には煤が付着し黒褐色を呈するが、胎土には真砂土系でバラつきがあり、褐色である。5は、やや外面に肥厚させた口縁部。内外面ともに麻埴がはげしいが、その外面には粗い繩文が施文されていた様子が看取できる。胎土には2mm大の石英を含み、けして堅密といえるものではなく、色調は橙褐色である。

実測石器(第8図・図版7-2)1・2は、B調査区の7層に出土した石錐と思われるものと、そして石器剝片。このうち前者は安山岩質のもので、石錐の錐部を損失したツマミ部分と思われるもの。



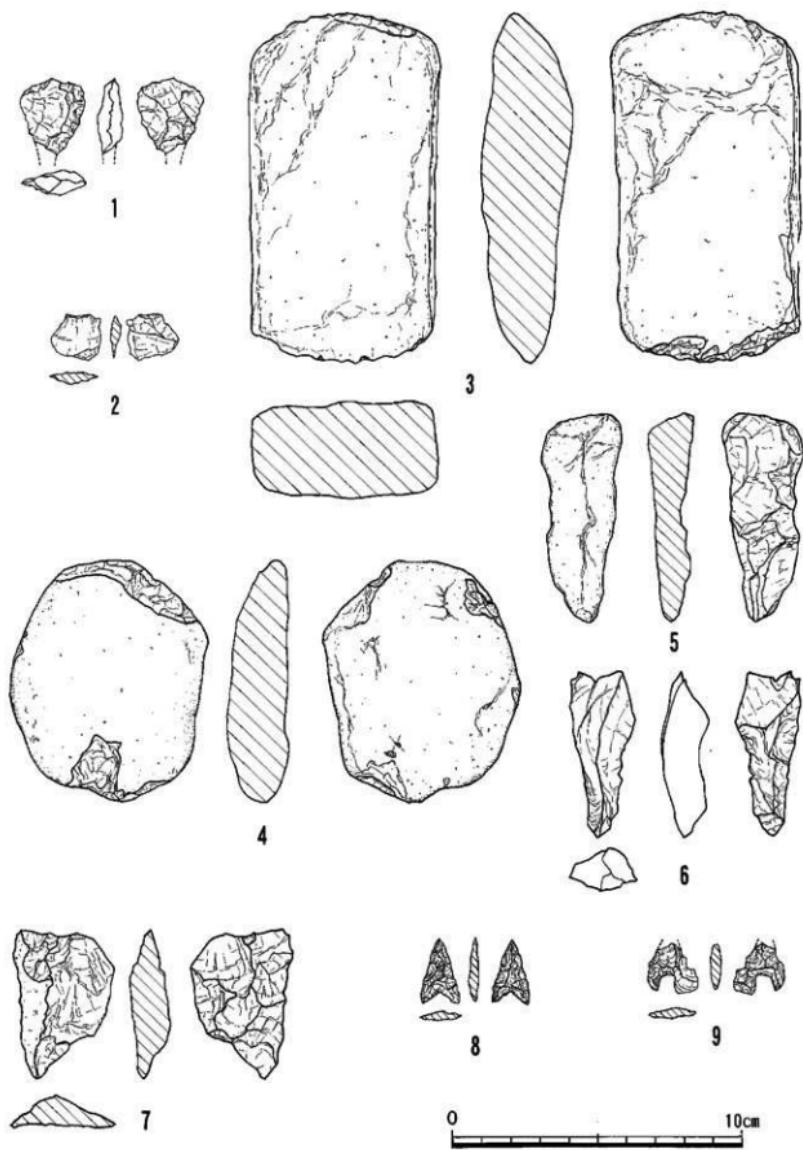
第7図 土器実測図

その指欠部分の断面は菱形を呈して、比較的ぶたいことから石錐と想定できる。背面の右辺側には厚さを調整したと思われる2次加工がみられ、また腹面側にも両辺からの細部調整がみられ、器径に比べて比較的器厚がある。2は、径1.3cm前後、厚さ0.4cmを測る安山岩質の石器剥片。2次加工はみられない。

3～9は、すべて5層から出土したもの。このうち3は、花崗岩質の礫器といえるものである。長さ約12cm、幅約6cm、厚さ約3cmを測って、ほぼ長方形である。大部分は自然体形のままであるが、長辺端部分に敲打で破損したものと思われる数打による打痕がみられる。なお、側辺には平坦面がみられるが、これは石目に沿って裂剝した自然面である。4は、長辺端を欠いた石錐。岩質は凝灰岩の自然石を用いたもので、長辺約8cm、幅約6.5cm、厚さ約2cm、重さ134gを測るもの。

5は、三角錐した礫器で、凝灰岩質のもの。背面側は自然面のみであるが、腹面側には周縁から数打の打痕がみられ、人為によるものであることがわかる。ただし機能的用途については、その打痕のみからは理解できそうもない。7・8は安山岩質の石器剥片である。このうち前者は、長三角錐形をした剥片で、横方向からの加撃で剥取されたものであるが、2次加工はない。7も同様、石器剥片で、意図的と思われる2次加工などはみられない。

8・9は、安山岩質の石錐。このうち前者は、鍔形を呈し、基部に顕著な抉入が施されている。周縁部からは丁寧な細部調整がされ、均整がとれて美形といえるもの。後者は、基部に丸みねびた抉入が施され、その端部も丸みねびた無茎のもの。刃先を欠き、石材に均質性がないためか、イレギュラーをおこし不整形である。



第8図 石器実測図

炭化物の出土状況（図版4-6）本炭化物はA B拡張区としたうちの、つまり12年度に実施した分布調査域での出土であった。その調査時においても部分的に採取したものであったが、当然これらのことから本格調査が必要であったため、中途で止めた箇所であった。

今回の調査においては、その残存部ということになるが、それは第5図（地区名図）で表示した地点で、地表から約2.18m下がった8層に出土したものであった。その炭化物塊は、径約55cmを測る円状の範囲内に点在、または充填するなど疎密差ある状態で南西壁間に出土した。堆積の仕方は皿状を呈し、厚い部分で8cmを測って、その坑界端の一部は南西壁に介入していたのである。



西側からみた半截による炭化物の堆積状況

遺跡の隣接地であったことには間違いないといえる。

これらの採り上げた炭化物は、遺物集計表に表示しているとおり380cm³で、重さ895g（乾燥したもの）であった。そして試料分析したものは平成12年度における分布調査時のものであったことを断つておきたい。

他に関連する遺構らしき痕跡がみられなかったので、本炭化物塊が何を意味するものかは判らないが、比較的多量に蓄積していたこと、円状にまとまりをもって出土したことなどからみると、人為による火が振られた場所であったとは間違いないであろう。

今回の調査は、開発に伴って河岸端という限られた範囲のものであったため、全容を窺うことはできなかつたが、いずれにしても本命地というべき

（渡辺友千代）

第5章 炭化物測定結果について

貴依頼による試料の¹⁴C年代測定結果を下記のとおり報告する

記

採取日及び試料名：

No.	採取日	試料名
KEEA-565	平成12年5月12日 及び5月15日	炭化物

採取者：栗田美文〔所属〕匹見町教育委員会

測定結果：

No.	依頼者コード	¹⁴ C年代	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) ²⁾	補正 ¹⁴ C年代
		/years BP ¹⁾		/years BP ³⁾
KEEA-565		6360 ± 80 (6540 ± 80)	-28.1	6300 ± 80

備考：1) ¹⁴C年代/years BP

¹⁴C年代測定で慣例になっているL i b b yの半減期5568年を採用し、西暦1950年までの経過年（years BP）で表しております。また、()内の年代は¹⁴Cの半減期として現在使用されている最新の値、5730年を採用し算出された値です。年代誤差は放射壊変の統計誤差（1 σ）から換算された値であり、測定結果が約70%の確率でこの範囲にあることを意味します。

2) $\delta^{13}\text{C}$ (‰)

試料の測定は¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比（¹³C/¹²C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比から千分偏差 (‰)。

3) 補正 C年代/years BP

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正值を加えた上で算出。

福岡市東区松香台1丁目10番1号

財團法人九州環境管理協会 川村秀久

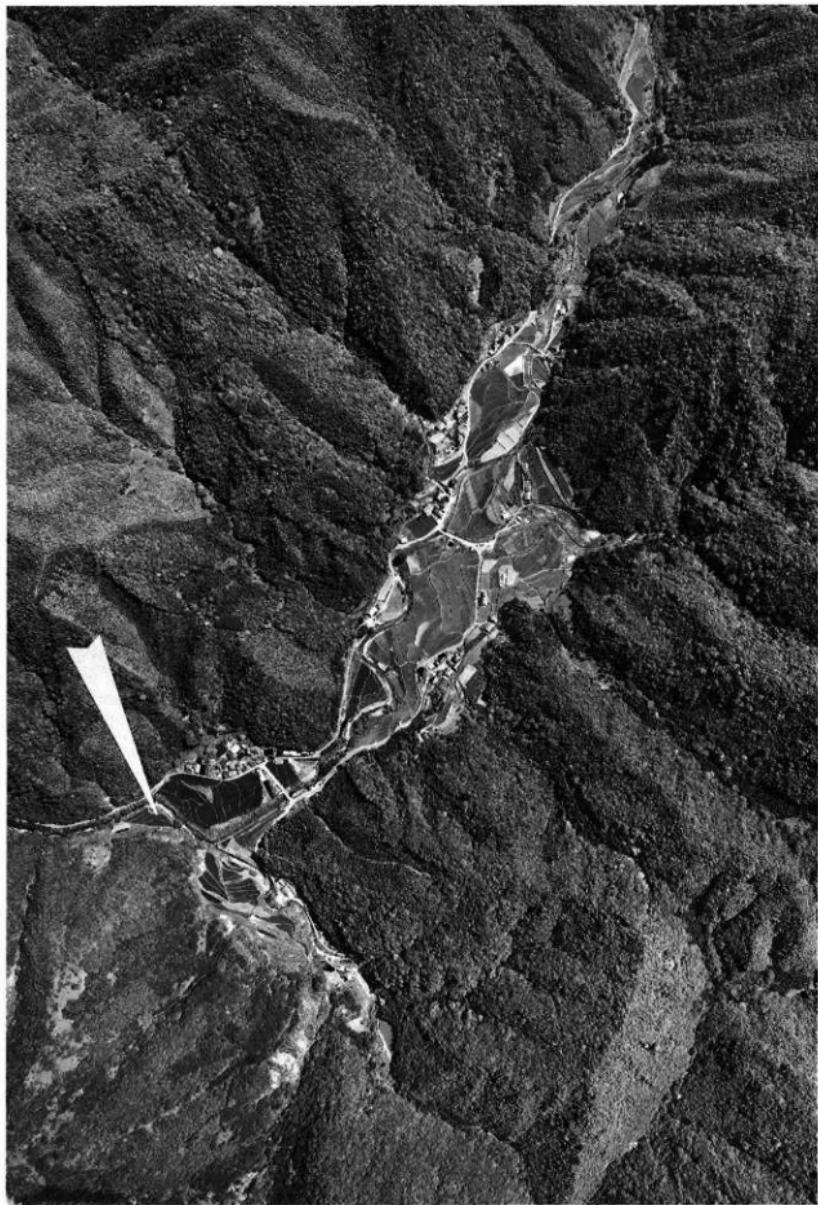
第6章 小 結

第4章で記述しているとおり、本遺跡での遺物は19点と極めて少量であった。しかも遺構として捉えることができたのは炭化物の堆積した1基にとどまり、けして評価できるものではなかった。これは開発予定地が河岸端という限られた範囲の調査であったため致の方ない。

しかし遺物が少量で、遺跡の性格が位置づけできなかったとはいえ、5層から出土した1片の爪形文は鷹島式のものと想定できるものであって、したがってこれに付随して出土した他の遺物の位置づけができたことは、それなりに効果はあったものといえよう。また8層に出土した表裏条痕文上器が、炭化物の分析から縄文早期末のものであったことが立証されたことによって、他の表裏条痕文系との比較検討する基準資料になったことは意義深いと思う。

今回の成果は、何といっても隣接地に本命地ともいるべき遺跡が未だ眠っているということを確認したことに意義深いものであったということができようかと思う。

(渡辺友千代)



調査地点鳥瞰



1. 東から紙祖川を挟んで遺跡を見る



2. 対岸の北側からみた遺跡



1. バックホーによる上位層の掘削作業



2. 発掘作業風景（上屋を設営して行った）

図版 4



1. B調査区に出土した土器（5層）



2. B調査区に出土した土器（5層）



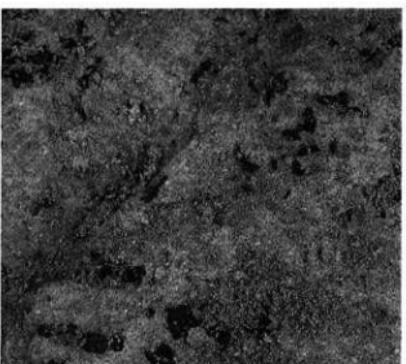
3. A調査区に出土した土器（8層）



4. B調査区に出土した石鎌（5層）



5. B調査区に出土した礫器（5層）



6. A-B拡張区に出土した炭化物（8層）



1. A調査区の北西・南西壁の堆積状況



2. A・B調査区の南西壁の堆積状況

図版 6



1. A調査区の北西壁の堆積状況



2. B調査区の南東壁の堆積状況

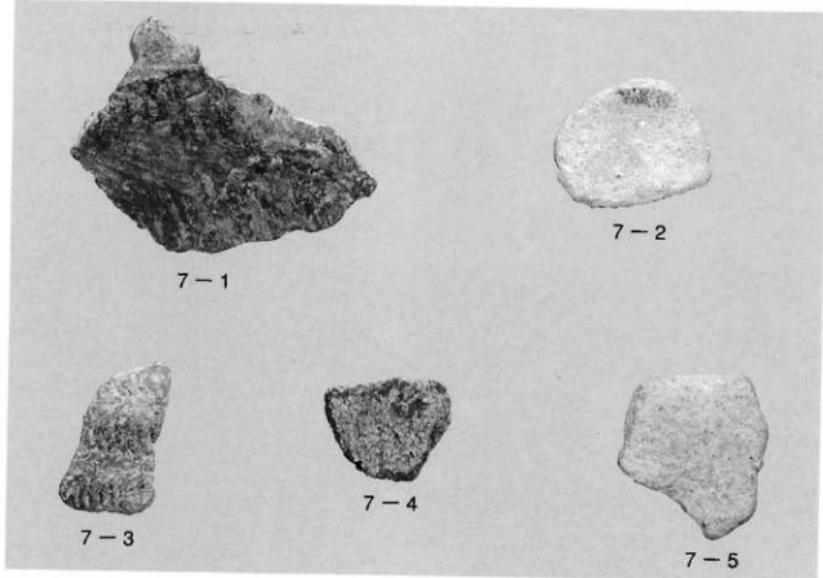


1. A調査区側からみた完掘状況（北西から）

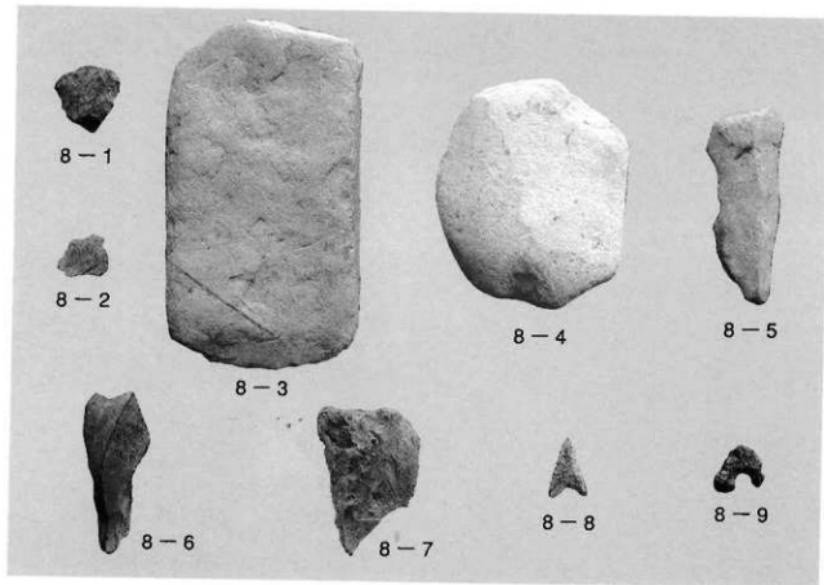


2. B調査区側からみた完掘状況（南東から）

図版 8



1. 実測土器類



2. 実測石器類

平成14年2月18日 印刷
平成14年2月25日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告書第38集
陣ヶ原遺跡発掘調査報告書

発行 匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町大字匹見字1260
印刷 株式会社 谷口印刷
島根県松江市東長江町902-59
